

グリーンコープ生協くまもの取り組みが 「持続可能な社会づくり」として 熊本日日新聞に連載されました

～掲載している記事は、(株)熊本日日新聞社より提供いただきました～

「SDGsについて熊本の皆さんにお伝えするとなつた時に、まず思い浮かんだのがグリーンコープさんだったんです」と電話を受けたのが、熊本日日新聞社の木村彰宏さんとの出会いでした。

木村さんはグリーンコープ生協くまもの組合員。産直びん牛乳や4R運動、グリーン市民電力の発電所づくり、熊本地震支援活動などグリーンコープの運動そのものが「SDGs」の掲げる「持続可能な社会づくり」を体現しているため、「ぜひ取材を」と希望されました。

木村さんは熊本県内だけでなく、福岡の産直びん牛乳工場や神在太陽光発電所まで熱心に取材をされ、取材内容を書き留めたノートは3冊ほどにも。「命のために」「人間と自然の共生」とグリーンコープの想いや運動の本質を突く記事に感動しました。

生命に寄り添い、みどりの地球をみどりのままに未来の子どもたちへの想いの下に続いてきたグリーンコープ運動を、木村さんのおかげで「SDGs」の視点から再認識することができました。この記事を通じて、さらにグリーンコープ運動をすすめていきます。

自信をもって
グリーンコープ運動を
すすめていきましょう！

グリーンコープ生協くまもと
理事長 高濱千夏

エスディー・ジーズ
熊本日日新聞「SDGs 持続可能な未来へ」

熊本発SDGs chapter2

安心・安全求め 生協の実践

- * 「SDGs」とは
- * 1. 牛乳の開発・・・飼料、瓶詰め 命のために
- * 2. 復活のハンバーグ・・・規格外野菜“絆”が生かす
- * 3. 遺伝子組み換え作物・・・独自に調査 対策求める
- * 4. 市民発電・・・「脱原発」の思い 自ら賄う
- * 5. 自然エネルギー・・・地域浮揚へ 資源生かす
- * 6. 被災地支援・・・「生活インフラ」の強み発揮
- * 7. 孤立を防ぐ・・・見守り続け「取り残さない」
- * 8. 多重債務・・・相談と貸し付け 生活再生へ
- * 9. 古着の再利用・・・スラムの学校運営支援
- * 10. 水俣病展を主催・・・人間と自然 共生支えたい

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

共生の時代

みどりの地球を
みどりのままで

臨時号

■発行：一般社団法人
グリーンコープ共同体理事会
■編集：共生の時代・編集部
■〒812-8561
福岡市博多区博多駅前一丁目5番1号
博多大博通ビルディング3階
TEL 092 (481) 7923
FAX 092 (481) 7876
<http://www.greencoop.or.jp/>



熊本発 SDGs CHAPTER 2

安心・安全求め 生協の実践

連載 あすスタート

連載「熊本発SDGs 持続可能な未来へ」第2章は、「グリーンコープ生協くまもと」(本部・熊本市)が展開する「安心・安全」な食品開発、太陽光発電や小水力発電など原発に頼らない電力供給などに注目。消費者の視点から持続可能な社会づくりについて考えます。



2000年9月より安全で豊かな世界づくりへの協力を約束する「国連ミレニアム宣言」

この宣言と、1990年代の国際会議などでの目標を反映したものが「ミレニアム開発目標(MDGs)」。

2015年までに達成する「貧困・飢餓」「環境」など8目標を設定。成果を挙げたが「乳幼児や妊産婦の死亡率削減」など未達成も。環境汚染や気候変動、自然災害などに対応する新たな指標が求められた。

12年6月 国連持続可能な開発会議(リオ+20)

15年9月 国連サミットで、16年から30年までに取り組む「持続可能な開発のための2030アジェンダ われわれの世界を変革する」を加盟193カ国の全会一致で採択

中核となる分野別目標が「SDGs」。途上国の課題が中心だったMDGsに対し、先進国も共に取り組む普遍的な目標となった。

16年5月 日本政府がSDGs推進本部設置

貧困やジェンダー、エネルギー、気候変動、海洋資源などでの達成度が低いとされる日本。政府は「あらゆる人々の活躍の推進」「健康・長寿の達成」「生物多様性、森林、海洋等の環境の保全」などを優先8分野に。

18年6月 SDGs未来都市に小国町など29自治体

19年7月 熊本市など31自治体を追加選定

SDGsとは？

17の目標「誰一人取り残さない」

持続可能な開発目標(SDGs=Sustainable Development Goals)は2015年、国連が採択した「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に基づいている。

2030アジェンダ(行動計画)は、貧困や飢餓といった主に途上国が抱える課題に加え、環境や気候変動など先進国も含めた地球全体の課題に注目。副題に「われわれの世界を変革する」と掲げる。基本理念は「誰一人取り残さない」だ。2030年までの達成を目指す。

重視するのは、世界の持続に欠かせない▽人間▽地球▽豊かさ▽平和▽パートナーシップの「五つのP」。「人間」の項では「貧困と飢餓に終止符を打ち、全ての人が尊厳と平等、健康な環境の下で潜在能力を発揮できるようにする」との決意を示している。

このアジェンダを、具体的な「17の目標」と「169のターゲット」に落とし込んだのが「SDGs」だ。

「17の目標」は経済、社会、環境と密接に絡み、この3点の調和を重視。環境保全は企業経営を圧迫しかねないといった従来の対立構図から脱却し、それぞれのバランスに重きを置くという新しい視点に立っている。

広範な「17の目標」だが、①～⑥は貧困や健康、水など人間の生存に欠かせない基本的な目標で、SDGsの前身「MDGs(ミレニアム開発目標)」を引き継ぐ。⑦～⑪は先進国にも絡む諸課題や経済問題、⑫～⑮は環境が軸だ。⑯や⑰は目標達成に欠かせない基礎的な要件を掲げる。

各目標に連なる計169項目の「ターゲット」は「いつまでに、何を、誰が、どう取り組むか」を提示。例えば、①「貧困をなくそう」では「2030年までに極度の貧困(1日1.25ドル未満での生活)を世界のあらゆる場所で終わらせる」など七つのターゲットを設けている。

2030アジェンダが掲げる重要分野 五つのP

People … 人間

Planet … 地球

Prosperity … 豊かさ

Peace … 平和

Partnership … パートナーシップ

新連載 第1章は「人生100年、復興の先に」

SDGsを座標軸にさまざまな現場の課題と将来像を探る新連載「熊本発SDGs 持続可能な未来へ」を始めます。第1章は、熊本地震で被災した益城町安永地区が挑む「人生100年時代」の復興。超高齢社会ニッポンに共通する課題とも向き合い、コミュニティの再構築を目指す人々の歩みを見つめます。

続く各章は、安全安心を追求する生協活動や、新たな成長の可能性を探る地場企業の動向に注目。環境保全や貧困問題も掘り下げ、県内外の実践例などを伝えます。担当は編集委員室の木村彰宏と小多崇です。



乳牛の乳頭を搾乳器を当てる酪農家の開倫太郎さん
＝8月20日、菊池市

消費者の思い 応えたい

酪農家の朝は早い。午前5時半。菊池市下河原の開倫太郎さん(46)の牛舎で乳搾りが始まった。「よし、よし。さあおいで」。開さんと妻美紀さん(38)の掛け声に、搾乳場所に進む牛が列を成す。グリーンコープ生協くまもと(高濱千夏理事長、熊本市)をはじめ、九州を中心とした14生協でつくるグリーンコープ連合の契約農家だ。遺伝子組み換え作物(GMO)を含まない飼料で乳牛約40頭を育てている。「私も子どもに安心して食べるものを食べさせたい。安全な牛乳を飲みたい人たちの思いに応えたい」と開さん。

1996年に米国で生産が始まったGMOは、除草剤などに耐性を持つ。健康への影響を懸念する生協組合員の声を受け、グリーンコープはGMOを使わない牛乳生産を模索。98年、JA菊池の協力で実現した。安全性が確認された飼料に加え、自ら汗して育てた牧草やトウモロコシも牛に与えている。「仕事は増えたがやりがいがある」と言う。

熊本発 SDGs CHAPTER 2 安心・安全 求め 生協の実践

①

「安心・安全な暮らし」を追求するグリーンコープ生協くまもとの活動を通して、消費者の視点から持続可能な社会づくりを考える。(編集委員 木村彰宏)

3面に続く

飼料、瓶詰め 命のために



雪印メグミルク福岡工場に設置されているグリーンコープの原乳を入れる四つのタンク＝福岡市南区

牛乳開発

1面から続く
「毎日飲む牛乳を良質で安全なものにしよう」と、酪農家やメーカーと一緒に作ってきた。グリーンコープ生協くまもとに上る。もとの組合員、篠原晴美さん(71)＝益城町＝は胸を張る。1980年代から商品委員として、消費者の立場から牛乳の開発に関わった。「私たち組合員の声が原点です」。

戦後の高度経済成長期以降、添加物を使った加工食品の大量生産・消費が当たり前になった日本社会。一方、食の安全性に不安を抱く消費者らが結集したのが生活協同組合だ。出資した消費者が組合員となった運営に携わる。グリーンコープ生協くまもとの組合員は県内6万4千人。他の13生協と構成するグリーンコープ連合では総計42万人に上る。

グリーンコープの合言葉は「安心・安全」。組合員は食品の安全性をエックス、開発にも当たる。シンボリックな存在が牛乳だ。米国で作付けが広がった遺伝子組み換え作物(GMO)を巡っては1998年、全ての牛乳をGMOを含まない飼料で生産に転換。2003年には森林資源にも目を向け、当時主流だった紙パックを瓶に転換した。

食づくりの理念に共鳴した」と工場長の山本修さん(54)は振り返る。こだわりは「おいしさ」にも。全国に先駆けて1984年、低温殺菌のパスタライズ牛乳を導入。一般的な高温殺菌に比べ、タンパク質やカルシウムなど成分の変成が少なく生乳に近い。篠原さんは「これも『牛乳を沸騰させてはいけないのになぜ』という組合員の素朴な疑問から始まった」と言う。

ヨーロッパの牛乳生産現場なども視察した篠原さんは、87年に脂肪球を砕かない「ノンホモ」の商品化にも成功。上部に浮く生クリームが味わい深い。

「牛乳も、どの商品も『命を大切に』との思いが詰まっている。次世代を担う子どもたちが大人になっても安心して暮らせる社会にしたい」。篠原さんは食の安心・安全に未来を重ねる。

(木村彰宏)

CHAPTER 2 安心・安全 求め 生協の実践

①

◇食の安全を重視したグリーンコープの牛乳開発。国連の「持続可能な開発目標(SDGs)」の「17の目標」に照らすと、遺伝子組み換え作物の排除は③「すべての人に健康と福祉を」に重なる。メーカーの協力態勢だ。



熊本発SDGs

持続可能な未来へ

2019.9.30

3 すべての人に
健康と福祉を15 陸の豊かさも
守ろう

遺伝子組み換え野菜を採取した県道臨港線沿いの植え込みを指さす
岩尾あかねさん(八代市)



CHAPTER 2

安心・安全 求め 生協の実践

3



八代市の八代港と九州自動車道八代インターを結ぶ県道臨港線。コンテナを積んだトレーラーが行き交う。グリーンコープ生協くまもとの組合員で八代西地区委員長、岩尾あかねさん(41)は3月、地元の

八代市であった遺伝子組み換え野菜の現地調査に参加した。臨港線のコンテナを積んだトレーラーが行き交う。グリーンコープ生協くまもとの組合員で八代西地区委員長、岩尾あかねさん(41)は3月、地元の

遺伝子組み換え作物

独自に調査 対策求める

07年に八代港近くで確認されたのを皮切りに、15年間に延べ19カ所で見つかった。グリーンコープ本部組合員事務局の國本聡子さん(58)は「別の港で野菜を積んだ車の洗浄が不十分で、あちこちに種を落とすのではないか」とみる。

組合員による独自調査を通して「身近な異変を知り、食の安全について考えてほしい」と國本さん。「すべての人に健康と福祉を」はSDGs(持続可能な開発目標)の一。子ども3人の母である岩尾さんは「食べたもので体は作られる。健康を害する恐れがあるもの、アレルギーや体の不調を引き起こす恐れがある」。在来種との交雑も危惧。「タカナやハク

2019・10・3



熊本発SDGs

持続可能な未来へ



ナカドモファームで、グリーンコープ生協くまもとの組合員にレンコン加工などについて説明する社長の中塘万格人さん(右端)と山本堅さん(右から3人目)
= 8月28日、宇城市松橋町

CHAPTER 2

安心・安全 求め 生協の実践

2

グリーンコープ生協くまもとが8月、熊本市で開いた「産直れんこん入り生ハンバーグ」販売の決起集会。宇城市松橋町のレンコン生産加工会社「ナカドモファーム」の山本堅さん(62)は、生

協組合員約150人を前に声を詰まらせた。「熊本地震から3年半、やっと商品を復活でき、胸が

「どうやって市場に出荷できるか毎日考えた」とグループ代表の中塘万格人さん(57)。被災した

「生産者を応援したい」という組合員の励ましに支えられて18年4月、ナカドモファームが発足。中塘さんが社長、山本さんが常務に就き、レンコンをみじん切りやペーストにする設備を整えた。

今回からハンバーグの加工を担う食肉卸売業「矢野畜産」(熊本市中

復活を望む声だった。グリーンコープに長年出荷する中塘さんらに、組合員に伝える実績があつた。除草剤を使わ

「生協と仕事をすると食べる人たちの視点で、ものを考えることができ」と社長の矢野悦生さん(67)。

「食べていると生産者の顔が浮かぶのがグリーンコープの商品」と柳田さん。安心・安全の価値観を共有する消費者と生

「食べていると生産者の顔が浮かぶのがグリーンコープの商品」と柳田さん。安心・安全の価値観を共有する消費者と生



「食べていると生産者の顔が浮かぶのがグリーンコープの商品」と柳田さん。安心・安全の価値観を共有する消費者と生

「食べていると生産者の顔が浮かぶのがグリーンコープの商品」と柳田さん。安心・安全の価値観を共有する消費者と生

「食べていると生産者の顔が浮かぶのがグリーンコープの商品」と柳田さん。安心・安全の価値観を共有する消費者と生

「食べていると生産者の顔が浮かぶのがグリーンコープの商品」と柳田さん。安心・安全の価値観を共有する消費者と生

「食べていると生産者の顔が浮かぶのがグリーンコープの商品」と柳田さん。安心・安全の価値観を共有する消費者と生



「食べていると生産者の顔が浮かぶのがグリーンコープの商品」と柳田さん。安心・安全の価値観を共有する消費者と生



「食べていると生産者の顔が浮かぶのがグリーンコープの商品」と柳田さん。安心・安全の価値観を共有する消費者と生



「食べていると生産者の顔が浮かぶのがグリーンコープの商品」と柳田さん。安心・安全の価値観を共有する消費者と生



「食べていると生産者の顔が浮かぶのがグリーンコープの商品」と柳田さん。安心・安全の価値観を共有する消費者と生

復活のハンバーグ

規格外野菜 “絆” が生かす

熊本発SDGs 持続可能な未来へ



「食べていると生産者の顔が浮かぶのがグリーンコープの商品」と柳田さん。安心・安全の価値観を共有する消費者と生



「食べていると生産者の顔が浮かぶのがグリーンコープの商品」と柳田さん。安心・安全の価値観を共有する消費者と生



「食べていると生産者の顔が浮かぶのがグリーンコープの商品」と柳田さん。安心・安全の価値観を共有する消費者と生



「食べていると生産者の顔が浮かぶのがグリーンコープの商品」と柳田さん。安心・安全の価値観を共有する消費者と生

7 エネルギーをみんなに
そしてクリーンに



11 住み続けられる
まちづくりを



太陽光発電パネル4228枚が並ぶ神在太陽光発電所＝福岡県糸島市

市民発電

「脱原発」の思い 自ら賄う

福岡県糸島市の田園地帯。集落に程近い林を抜ける坂道を上ると視界が開け、丘陵約2秒に42枚もの発電パネルが並び、2013年に発電を始めた神在太陽光発電所だ。

「脱原発を求める組合員の思いの結晶です」。12年の市民電力設立時から今年6月まで専務理事を務めた大橋年徳さん(61)は感慨深げだ。

「原発反対の取り組みは、旧ソ連・ウクライナで1986年に起きたチェルノブイリ原発事故にさかのぼる。爆発後の火災などに当たった数十人が急性放射線障害で死亡。放射性物質の汚染で約33万人が移住し、がんなどによる死者が推定4千～9千人に達した衝撃的な事故だった。当時、グリーンコープ

は「原発と人類(生命)は共存できない。みどりの地球をみどりのままに、子どもたちに手渡す」と申し合わせた。事故の悲惨さを伝える映画上映や写真展を熊本市などで開催。食品の放射能汚染調査にも乗り出した。

新たな取り組みの発端は、神在発電所だった。併設した自然エネルギーの研修施設には年間500人ほどが訪れる。九州電力玄海原発まで直線で30キロ。運営担当の小川智恵子さん(71)は「組合員に限らず、原発に不安を感じて見学に来る人もいます」と話す。

市民電力は、グリーンコープ連合加盟の生協がある兵庫県や宮崎県でも直営のメガソーラーを建設。15年には菊池市で、民間の菊池自然電力に出資して熊本菊池太陽光発電所の稼働に参画した。

(木村彰宏)

CHAPTER 2 安心・安全 求め 生協の実践

4



「脱原発を求める組合員の思いの結晶です」。12年の市民電力設立時から今年6月まで専務理事を務めた大橋年徳さん(61)は感慨深げだ。

「原発と人類(生命)は共存できない。みどりの地球をみどりのままに、子どもたちに手渡す」と申し合わせた。事故の悲惨さを伝える映画上映や写真展を熊本市などで開催。食品の放射能汚染調査にも乗り出した。

新たな取り組みの発端は、神在発電所だった。併設した自然エネルギーの研修施設には年間500人ほどが訪れる。九州電力玄海原発まで直線で30キロ。運営担当の小川智恵子さん(71)は「組合員に限らず、原発に不安を感じて見学に来る人もいます」と話す。

市民電力は、グリーンコープ連合加盟の生協がある兵庫県や宮崎県でも直営のメガソーラーを建設。15年には菊池市で、民間の菊池自然電力に出資して熊本菊池太陽光発電所の稼働に参画した。

(木村彰宏)

自然エネルギー

地域浮揚へ 資源生かす

「豊富な自然エネルギーを地域活性化に役立てたい」。2007年春まで小国町長を務めた宮崎暢俊さん(78)は現在、13年に設立した会社「ローカル・パワー」の社長を務めている。

11年の東京電力福島第1原発事故以来、各地に広がった太陽光発電所。「小国町でも大手が大規模発電所(メガソーラー)を次々に建設したが、地元経済効果はなかった」。こんな問題意識で会社を設立。東京

のNPO法人の仲介で出会ったのが、グリーンコープ生協くまもとだがつくった「グリーン・市民電力」だった。

第1弾は17年、小国町下城で始めた馬洗瀬小水力発電所(22キロワット)。農業用水路を利用し、高低差約30メートルを流れる水の勢いで発電する。

宮崎さんの会社と市民電力、NPO法人の3者は16年5月、事業会社「グリーンパワー小国」を設立。ここでも宮崎さんが社長に就き、自然エネルギーを生かした発電事業を実現している。

「少しでも地元経済に波及をもたせたい」というのが、グリーンコープ生協くまもとの思い。小水力発電で、近くのコメ農家に水路の清掃や点検を委託。バイナリー発電の電源所有者には管理費を払っている。「グリーンコープ組合員の見学もあり、地域間交流につながっている」と言う。

一方、パートナーを組む生協の市民電力が重視したのは「原発フリー」の電力供給だった。チェルノブイリ原発や福島第1原発の事故が大きな教訓だ。太陽光を中心とした発電事業に加え、市民電力は16年に福岡、熊本両県で相次いで電力供給事業をスタート。同年4月に始まった、各家庭が電気の契約先を自由に選べる「電力小売りの全面自由化」がきっかけとなった。

独自の太陽光発電所は供給元としては不安定なため、グループの一角に加わった「丸紅新電力」のバイオマス発電による電気を各家庭に供給している。当初はバックアップとして九州電力との契約も必要で、原発との間に一線を画すことは難しかったという。しかし、電力供給の制度見直しなどもあり、九電との契約も18年に解除。完全な「原発フリー」を実現した。

現在は、小国町の二つの発電所も供給元に組み込まれている。宮崎さんは言う。「組合員に直接電気を送ることで、古里の資源が生かされていると実感している」

(木村彰宏)

「豊富な自然エネルギーを地域活性化に役立てたい」。2007年春まで小国町長を務めた宮崎暢俊さん(78)は現在、13年に設立した会社「ローカル・パワー」の社長を務めている。

11年の東京電力福島第1原発事故以来、各地に広がった太陽光発電所。「小国町でも大手が大規模発電所(メガソーラー)を次々に建設したが、地元経済効果はなかった」。こんな問題意識で会社を設立。東京

のNPO法人の仲介で出会ったのが、グリーンコープ生協くまもとだがつくった「グリーン・市民電力」だった。

第1弾は17年、小国町下城で始めた馬洗瀬小水力発電所(22キロワット)。農業用水路を利用し、高低差約30メートルを流れる水の勢いで発電する。

宮崎さんの会社と市民電力、NPO法人の3者は16年5月、事業会社「グリーンパワー小国」を設立。ここでも宮崎さんが社長に就き、自然エネルギーを生かした発電事業を実現している。

「少しでも地元経済に波及をもたせたい」というのが、グリーンコープ生協くまもとの思い。小水力発電で、近くのコメ農家に水路の清掃や点検を委託。バイナリー発電の電源所有者には管理費を払っている。「グリーンコープ組合員の見学もあり、地域間交流につながっている」と言う。

一方、パートナーを組む生協の市民電力が重視したのは「原発フリー」の電力供給だった。チェルノブイリ原発や福島第1原発の事故が大きな教訓だ。太陽光を中心とした発電事業に加え、市民電力は16年に福岡、熊本両県で相次いで電力供給事業をスタート。同年4月に始まった、各家庭が電気の契約先を自由に選べる「電力小売りの全面自由化」がきっかけとなった。

独自の太陽光発電所は供給元としては不安定なため、グループの一角に加わった「丸紅新電力」のバイオマス発電による電気を各家庭に供給している。当初はバックアップとして九州電力との契約も必要で、原発との間に一線を画すことは難しかったという。しかし、電力供給の制度見直しなどもあり、九電との契約も18年に解除。完全な「原発フリー」を実現した。

現在は、小国町の二つの発電所も供給元に組み込まれている。宮崎さんは言う。「組合員に直接電気を送ることで、古里の資源が生かされていると実感している」

(木村彰宏)

CHAPTER 2 安心・安全 求め 生協の実践

5



「豊富な自然エネルギーを地域活性化に役立てたい」。2007年春まで小国町長を務めた宮崎暢俊さん(78)は現在、13年に設立した会社「ローカル・パワー」の社長を務めている。

11年の東京電力福島第1原発事故以来、各地に広がった太陽光発電所。「小国町でも大手が大規模発電所(メガソーラー)を次々に建設したが、地元経済効果はなかった」。こんな問題意識で会社を設立。東京

のNPO法人の仲介で出会ったのが、グリーンコープ生協くまもとだがつくった「グリーン・市民電力」だった。

第1弾は17年、小国町下城で始めた馬洗瀬小水力発電所(22キロワット)。農業用水路を利用し、高低差約30メートルを流れる水の勢いで発電する。

宮崎さんの会社と市民電力、NPO法人の3者は16年5月、事業会社「グリーンパワー小国」を設立。ここでも宮崎さんが社長に就き、自然エネルギーを生かした発電事業を実現している。

「少しでも地元経済に波及をもたせたい」というのが、グリーンコープ生協くまもとの思い。小水力発電で、近くのコメ農家に水路の清掃や点検を委託。バイナリー発電の電源所有者には管理費を払っている。「グリーンコープ組合員の見学もあり、地域間交流につながっている」と言う。

一方、パートナーを組む生協の市民電力が重視したのは「原発フリー」の電力供給だった。チェルノブイリ原発や福島第1原発の事故が大きな教訓だ。太陽光を中心とした発電事業に加え、市民電力は16年に福岡、熊本両県で相次いで電力供給事業をスタート。同年4月に始まった、各家庭が電気の契約先を自由に選べる「電力小売りの全面自由化」がきっかけとなった。

独自の太陽光発電所は供給元としては不安定なため、グループの一角に加わった「丸紅新電力」のバイオマス発電による電気を各家庭に供給している。当初はバックアップとして九州電力との契約も必要で、原発との間に一線を画すことは難しかったという。しかし、電力供給の制度見直しなどもあり、九電との契約も18年に解除。完全な「原発フリー」を実現した。

現在は、小国町の二つの発電所も供給元に組み込まれている。宮崎さんは言う。「組合員に直接電気を送ることで、古里の資源が生かされていると実感している」

(木村彰宏)



熊本発SDGs

持続可能な未来へ



熊本発SDGs

持続可能な未来へ

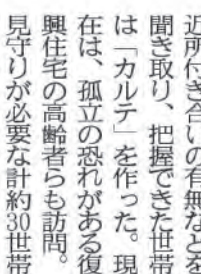




横茂さん(左)と言葉を交わすグリーンコープ災害支援センターの津志田和義さん。8月23日、益城町の災害公営住宅「砥川団地」

CHAPTER 2 安心・安全求め 生協の実践

7



見守りが必要な計約30世帯

訪問活動以外にも、高齢

2019・10・8

「こんにちは」。グリーンコープ災害支援センターの津志田和義さん(70)が、ドア越しに呼び掛けるが返事はない。一戸建ての平屋が並ぶ益城町砥川地区の災害公営住宅(復興住宅)。

熊本地震の被災者が暮らす。繰り返す声を聞くと、横茂さん(85)がやっと姿を見せた。横茂さんは自宅が全壊した。仮設暮らしの後、自力で再建が困難な被災者向けの復興住宅に入ったのは今年2月。同居の長女が仕事に出ている日は「1人暮らし」だ。

市東区の物流センター内に、2カ月に1回のペースで訪ねている。津志田さんの担当先の一つ、益城町豊原の富野満枝さん(70)は地震後も自宅でも1人暮らしを続けた。震災による混乱の中、重くのしかかったのは「不安感」だった。「家にいると、町に災害支援で来た人と会うことが多かった」。グリーンコープの調査が入ると、「私も忘れられていなかった」と安心していった。津志田さんは「地震から3年半たっても見守りが必要。気持ち前向きになれない人がいる」と言う。



持続可能な未来へ

孤立を防ぐ

見守り続け「取り残さない」



「東無田食堂」で住民と談笑するグリーンコープ生協くまもと理事長の高濱千夏さん(左端の笑顔) 8月1日、益城町の小池島田仮設団地

CHAPTER 2 安心・安全求め 生協の実践

6



毎週参加する山田貞子さん(85)は「おいしくて、いつも完食です。近くにいてもあまり会えないから、みんなの話を聞けるのがうれしい。欠かさず通う高濱さん、住民とはすっきり顔なじみだ。自身も御船町の自宅で被災しながら、当初から支援活動を引き継ぎ、肉のみそいため。ニンニクやショウガの香りが食欲をそそる。

全国的生協は日頃から食料や日用品を取り扱い、戸別宅配を含む物流網も備えた「生活インフラ」としての役割を果たしている。その強みを生かし、東日本大震災など過去の大災害でも積極的に被災地を支えてきた。熊本の実情を把握す

2019・10・7



熊本発SDGs
持続可能な未来へ



被災地支援

「生活インフラ」の強み発揮

「きょうも楽しくおしゃべりしてささいね」。グリーンコープ生協くまもと理事長の高濱千夏さん(39)が、食卓を囲む人たちに語り掛ける。

2016年4月の熊本地震で被災した益城町東無田地区にある小池島田仮設団地の集会所。住民でつくる復興委員会とグリーンコープが定期的に開いている食会「東無田食堂」の風景だ。

仮設暮らしで簡単な食事になりがちの高齢者には、栄養をとりつつも、復興委員会の協力を要請。18年6月から2回、週末に開く食堂には毎回30人ほどが集う。既に自宅を

再建した人も多く、住民同士の語らいの場になっている。食材はグリーンコープが無償提供。参加する住民も、担い手として生協スタッフと一緒に包丁を握る。一食200円で、集まったお金は地区に還元する。この日のメイン料理は「なすと豚肉のみそいため」。

全国的生協は日頃から食料や日用品を取り扱い、戸別宅配を含む物流網も備えた「生活インフラ」としての役割を果たしている。その強みを生かし、東日本大震災など過去の大災害でも積極的に被災地を支えてきた。熊本の実情を把握す

と、炊き出しや弁当提供を開始。「野菜を食べていない」と聞けばサラダをメニューに加えた。「赤ちゃんを連れてお母さんが「炊き出しが始まって母乳が出るようになった」と喜んでくれた」という。グリーンコープ周辺の活動は4カ月に及び、4万食を提供した。

熊本地震から3年半。粘り強い支援活動は、グリーンコープ連合を通じて全国から寄せられた2億3千万円ものカンパが支えている。

(木村彰宏)



パキスタンのアル・カイルアカデミーで授業を受ける学ぶ幼児クラスの子どもたち（社会福祉法人グリーンコープ提供）

CHAPTER 2 安心・安全求め 生協の実践

⑨



福岡県粕屋町にある3階建ての作業所兼倉庫。別荘した古着がそれぞれ山積みになり、フロアを埋めている。社会福祉法人グリーンコープの施設「ファイバーリサイクルセンター」だ。熊本を含め、九州を中心としたグリーンコープ連合加盟の14生協の組合員から次々と古着が送られてくる。上着、シャツなどを72種類に分別。海外の古着市場に輸出している。事業開始は2010年。センター長の清水清子さんは「この活動には三つの目的がある」と言う。一つが「国境を越えた子どもたちへの支援」だ。日本の他団体と連携。古着輸出の利益を、パキスタンの都市カラチのスラム地区にある学校「アル・カイルアカデミー」の運営に役立てている。グリーンコープだけでもこれまでに出荷した衣類は480トンを超え、支援額は1500万円に上る。

「ごみ処分場に数千人が住み、燃やしたごみの中から拾った銅や鉄などを売って生活している。子どもたちは劣悪な環境で暮らしている」。現地視察を通し、清水さんは支援活動の意義を実感したという。

アカデミーは複数のキャンパスに分かれ、幼児から中学生まで総勢4500人が通う。学習環境が整い、大学進学を志す生徒も多い。校長はグリーンコープに謝辞を送っている。「もし学校がなければ、彼らは児童労働や路上での犯罪に向かう。皆さんの支援はスラム地域の教育と福祉を支えています」

目的の二つ目は、グリーンコープが運営するホームレス入居施設「抱擁館福岡」で、古着梱包の指導に当たっている。

（福岡市で暮らす人々が、社会復帰を目指す訓練施設としての役割だ。）

リサイクルセンターでは、抱擁館の入居者ら13人が中心となって働いている。2年前に入居した中田敏雄さん(71)は「建設関係の仕事がなくなり、気付くとホームレスになっていた」。センターでは「日本の古着が、パキスタンの子どもたちを支えている」と思うとやりがいがあった」と振り返る。その後、別の仕事を見つけて退所。自立した現在に感謝している。

（木村彰宏）

2019・10・11



熊本発SDGs

持続可能な未来へ

グリーンコープ生協くまもと生活再生相談室で相談への対応を話し合う室長の村上浩勝さん（左）と室長補佐の中島明美さん（熊本市中心区）



CHAPTER 2 安心・安全求め 生協の実践

⑧



「仕事をなくし子どもの学費が払えない」「家賃を滞納して退去するよう言われた」

熊本市中央区のビル2階にあるグリーンコープ生協くまもと生活再生相談室で、多重重債務者を巡っては2005年ごろから、返済能力を無視した過剰融資が社会問題化。翌06年には230万円の借入がきっかけで、突然の入院や失業、給料未払いなどがきっかけで、普通に暮らしてきた人々が、多重重債務者になってしまった。

組合員のみが対象だった初年度は455件の相談があり、生活資金として19件を貸し付けた。10年度には県から受託した多重重債務者生活再生支援事業に衣替えし、対象を県民全体に広げている。

「貸し付けありきでなく、生活の見通しを立てるのが私たちの役目」。中島さん

組合員のみが対象だった初年度は455件の相談があり、生活資金として19件を貸し付けた。10年度には県から受託した多重重債務者生活再生支援事業に衣替えし、対象を県民全体に広げている。

「貸し付けありきでなく、生活の見通しを立てるのが私たちの役目」。中島さん

（木村彰宏）

2019・10・9



熊本発SDGs

持続可能な未来へ



多重債務者

相談と貸し付け 生活再生へ

「仕事をなくし子どもの学費が払えない」「家賃を滞納して退去するよう言われた」

熊本市中央区のビル2階にあるグリーンコープ生協くまもと生活再生相談室で、多重重債務者を巡っては2005年ごろから、返済能力を無視した過剰融資が社会問題化。翌06年には230万円の借入がきっかけで、突然の入院や失業、給料未払いなどがきっかけで、普通に暮らしてきた人々が、多重重債務者になってしまった。

組合員のみが対象だった初年度は455件の相談があり、生活資金として19件を貸し付けた。10年度には県から受託した多重重債務者生活再生支援事業に衣替えし、対象を県民全体に広げている。

「貸し付けありきでなく、生活の見通しを立てるのが私たちの役目」。中島さん

組合員のみが対象だった初年度は455件の相談があり、生活資金として19件を貸し付けた。10年度には県から受託した多重重債務者生活再生支援事業に衣替えし、対象を県民全体に広げている。

「貸し付けありきでなく、生活の見通しを立てるのが私たちの役目」。中島さん

組合員のみが対象だった初年度は455件の相談があり、生活資金として19件を貸し付けた。10年度には県から受託した多重重債務者生活再生支援事業に衣替えし、対象を県民全体に広げている。

「貸し付けありきでなく、生活の見通しを立てるのが私たちの役目」。中島さん

組合員のみが対象だった初年度は455件の相談があり、生活資金として19件を貸し付けた。10年度には県から受託した多重重債務者生活再生支援事業に衣替えし、対象を県民全体に広げている。

「貸し付けありきでなく、生活の見通しを立てるのが私たちの役目」。中島さん

組合員のみが対象だった初年度は455件の相談があり、生活資金として19件を貸し付けた。10年度には県から受託した多重重債務者生活再生支援事業に衣替えし、対象を県民全体に広げている。

「貸し付けありきでなく、生活の見通しを立てるのが私たちの役目」。中島さん

組合員のみが対象だった初年度は455件の相談があり、生活資金として19件を貸し付けた。10年度には県から受託した多重重債務者生活再生支援事業に衣替えし、対象を県民全体に広げている。

「貸し付けありきでなく、生活の見通しを立てるのが私たちの役目」。中島さん

組合員のみが対象だった初年度は455件の相談があり、生活資金として19件を貸し付けた。10年度には県から受託した多重重債務者生活再生支援事業に衣替えし、対象を県民全体に広げている。

「貸し付けありきでなく、生活の見通しを立てるのが私たちの役目」。中島さん



水俣病展を主催

人間と自然 共生支えたい

「食べ物を扱う私たちにまもと理事長の高濱千恵さん(39)は、あいさつの言葉として、水俣病は原点です。2017年11月16日、熊本市中央区の県立美術館分館で始まった水俣病展」の開会式。主催者として臨んだグリーンコープ生協く

親として子どもたちに安全なものを食べさせたいの思いで、生協活動に参加してきました」

これを機に、患者らとの関係が深まった。グリーンコープ生協くまもととは今年3月、水俣市に大規模太陽光発電所を持つ「全国ご当地エネルギー協会(東京)」と共同で、「水俣・熊本みらい基金」を設立。売電収益で水俣病の伝承や、熊本の地震の被災者支援などに取り組み団体を支援していくという。

熊本発SDGs
持続可能な未来へ



「水俣病展」の会場に展示された患者らの追憶に見入る親子。2017年11月、熊本市中央区の県立美術館分館(小野宏明)

CHAPTER 2 安心・安全求め 生協の実践

10

生協の根幹は「食の安全」にあると言っ高濱さん。「母

「魚を食べて、まさか自

会場には水俣病患者約500人の遺影が並んだ。そ

※第2章(CHAPTER 2)は終了。次章は、地場企業の取り組みを通してSDGsを巡る経済界の動向を探ります。

2019・10・14



く熊本日日新聞の連載記事の紹介に寄せてく

グリーンコープにとって日常のあたり前が「SDGs」に到達していました！

一般社団法人グリーンコープ共同体 代表理事 熊野千恵美

「SDGs」という言葉を

してくるものばかりです。

ながつています。また、安心・安全な食べものを得るには、

グリーンコープの食べものを

耳にしたのは、実はつい最近のことです。「持続可能な開発目標」の略称で、国際社会共通の17の目標があるそうです。驚いたことに、その一つひとつのどれもグリーンコープが取り組んでいることだということに気づかされたのです。

今から約30年前ネグロスの子どもたちが飢餓に苦しんでいたことに目をそらすことができずに、「生きてほしい！」と願った組合員の思いが、つくり出した「南と北の共生」の象徴的な民衆交易品です。そこからアジアの国々の人たちの暮らしへとつながり、連帯へと広がりました。

た例えば、「誰もが住んでいる地域で安心して暮らしていきたい」という願い。それが福祉の取り組みをおして、豊かな地域社会の再生へとつ

のちこは、人々の日々の暮らしの中で育まれ守られると思っています。いのちに寄り添ってきたグリーンコープの歩みそのものが、「SDGs」への道につながっているように思います。顔と顔の見える感じてください。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

